



上の写真は、ビデオ『レーン・宮澤事件—もうひとつの12月8日』のラストシーンからの一部である。上段は、1943年（昭和18）10月21日に、雨の神宮外苑競技場で行われた出陣学徒壮行大会で、学生服姿で銃を肩に行進する学生たちの足元をとらえ、下段は、50年後の1993年10月、防衛大学学生の分列行進での表情をとらえた。

キーワードは、
「大きな曲り角に立っている」——。

あつという間の26年、いま、日本は既に曲がり角を越え、戦争への道に踏み出しているのではないか。

こう思いを正した時、じっとしているわけにはいかない。

では、何を、どうすればよいのか。

本会は2018年1月、『国家権力犯罪を糺す 宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録』を刊行した。その冒頭には「国家権力犯罪を糺し、新たな運動を巻き起こす一助に」と記している。

いま、「新たな運動」が問われている。たしかに運動は起こっている。だが広がらない。そこには運動に加わらない、いや無視、無関心と思える巨大な層が浮遊している。さらには、もっと困った層が浮上している。先の大戦で骨の髄から思い知った平和の尊さを基盤に築き上げた価値観、行動規範を根底から否定し、はなから敵対してかかる、もっと乱暴で危険な層だ。

分断、二極化を煽る危険で無責任なキーワードが横行している。

だからこそ愚直を思い返したい。いまこそ愚直から始めたい。

国家権力犯罪に「時効」はない。この決意を新たに、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」とは何だったのか、そこに頭れた国家のありようを、徹底追及し共有していかなければならない。真相を阻む闇を糾し、共有の輪を一輪でも二輪でも広める中で分断・二極化をはかる壁を崩し、その結集力をもって国家権力そのもののありようを根源から正し、二度と国家権力犯罪を起こさせないよう、国家としての謝罪と賠償を厳に求める。この展望のもと、その一歩たる本冊子を取りまとめた。

（『宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録』は、本会ホームページで全文を公開しているほか、国会図書館で閲覧できます）

<http://miyazawa-lane.com/>